

Dさんの場合

息子さんが知的障害（当時5歳）

居住地：仙台市青葉区

インタビュー日：2023年11月2日

お話：Dさん

聞き手：橋本武美

橋 今日、マー君のお母さんです。マー君は震災当時、年長さん？

D そうだね。

橋 で、保育園とか、通ってたところはどういう？

D 自宅は台原なんだけど、泉中央からバスで職場に行ってたから、泉中央のプーさん保育園っていうところに行ったのね。

橋 普通の保育園だね？

D そうだね。

橋 保育園の普通の人たちの中に入ったの？障害者枠？

D あ、違う違う。

橋 じゃないんだ。

D 生後2ヶ月からお世話になっているところだったから。ほら最初はさ、子どもって障害があるかどうか分からないじゃん。みんな何もできないからさ。

橋 途中から分かってくるんだよね、発達障害はね。

D だんだんね、そう。だからそこでずっと就学前までお世話になって。ただやっぱり定期的に健診があるじゃない？発達のことで。乳児健診とか。

橋 うんうん。3歳児健診とかね。

D うん。その時に市立病院でいろいろ指摘があって、拓桃医療センターっていうのが前は秋保にあったんだけど、そこで母子入所とかも1ヶ月くらいしたのかな。

橋 入所？入所ってことは、ショートステイみたいに、そこにお泊まり？

D そうそう。

橋 へー。

D なんか、できる時にやっておいたほうが後で後悔しないかなと思って、病院から提案があったから、仕事も調整して、ゴールデンウィークも利用しながら。

橋 へー。それは、成長の過程で何となく「あれ？」とか「もしかしたら」とか？

D うん、お医者さん的にはそんな感じで。

橋 市立病院にもともと雇っていて？

D そこで産まれたの。

橋 産まれた病院で、そのあとで。

D 産まれたから健診もそこで。

橋 何歳ぐらいの時に？

D 1歳半くらいかなあ。

橋 あ、もう1歳代で。

D うん。それで、別に強制じゃなくて「もし心配だったら拓桃医療センターで詳しく診てもらおうということもあ

ります」みたいな言い方だったのね。

橋 それは、じゃあ先生のほうから言ってくれたのね。お母さんが相談したんじゃないで。

D そう。ほら1歳半なんてさ、みんなチンタラやってるじゃん、赤ちゃんなんて。

橋 男の子だから特にね。

D うん。で、コロコロ移動したりはしてたから、まあ言葉とかは無かったけども、何かおしゃべりっていうかな、音を出すくらいはやってたけど。やっぱり体が硬いっていうか。

橋 関節が硬いみたいな？

D あとで分かったんだけど、側湾。背骨が少し曲がって柔軟性が無かったんだよね。

橋 それもお医者さんのほうで少し気になったのかな、気づいてくれたのかな。

D それは、拓桃に通い始めて少し経ってからかなー。入所した時は、1歳半だからね、そんな詳しいことは分かんなかったけども。

橋 経過観察しましょうみたいな感じ？

D そんな感じ。

橋 うんうん。

D そして、そういうところに関わってたほうが何かの時に支えになるっていうか、頼りになるかなって。

橋 拓桃、遠いけどねー。

D そうね、でも通ったよ。

橋 大変だったね。

D 入所のあと OT（注：作業療法 / Occupational Therapist）とか。

橋 うんうん。OT……ST（注：言語療法 / Speech-Language-Hearing Therapist）もたぶんもちろんやっただろうし、ね。

D STもやった。

橋 そうかー。

D あそこは小児科だから、小児科っていう科は無いんだけど、神経科かな、うん。あと整形。

橋 じゃあ諸々……。

D 何か心配なことがあって、ちょろっと口に出して相談すると、「じゃあ」って感じでいろいろ紹介してもらえた。最初は神経科だったのね。で、神経科の先生にいろいろ話すと、OTとかSTとか、あと歯科とか。

橋 すごい、至れり尽くせりだ（笑）

D そう、やっぱり総合病院だから、拓桃医療センターはね。特に療育に関する専門的な総合病院だから。歯科はね、大学病院から先生が来る流れだったから、もう歯科のために秋保まで来るのは大変だから、大学病院を紹介してくれたの。

橋 じゃあ歯医者は後から大学病院の障害者歯科？

D 小児歯科だな、小児歯科。障害何とかっていう窓口もあったけど……。

橋 うちの障害者歯科に行ってるよ、大学病院の。

D え、小児歯科と障害者歯科ってどう違うんだろう？

橋 それはやっぱり別物。別物っていうか……。

D でも歯のメンテナンスだよな。

橋 障害者歯科は一番奥で、結構大きい診察台でちゃんと締めてくれて。

D ふーん。何階？

橋 5階かなんかの一番奥にある。だから、待合も普通のところで待たなくていいのよ。

D じゃあ小児歯科よりももっと至れり尽くせりな感じ？

橋 うーん、至れり尽くせりっていうわけではないけど、離れてるから気が楽。

D なるほどね。

橋 あと先生が分かってる。

D 理解があるんだ。

橋 うん、障害者歯科としてやってるから。

D じゃあマー君もそのうち障害者歯科にって言われるかもしれないね。今、学生だからさ。

橋 うんうん、気楽でいいよ。

D そうだ、5階も行ったの。小児歯科でやっぱり摂食のこととか心配したら、「じゃあ摂食指導の先生紹介します」って言ってもらえて、5階のエレベーター上がってすぐのところにお部屋があって、そこでお弁当持って行って食べ方見てもらったり。

橋 へー。

D 結構通って、中1、2、3、高1、2……計5年くらい通った。

橋 あれ、今マー君っていくつになったの？

D 18。高3。いよいよ卒業。

橋 あーそうだ。そうだよー。

D 去年までやってた、それ。でも部署が無くなっちゃって、「マー君大丈夫ですから」って言われて。

橋 大丈夫ですからって。

D そう。でも通って良かったの。一時は担任の先生が心配しちゃってさ、なんか光明で喉につかえて亡くなったお子さんいたよね。そういうことがあった後だったこともあって。で、一時は手もとカットだったのを、刻み食に変えてもらって。

橋 より安全にっていうことね。

D うーん、まあ試してみましようかって感じで。でも良かったの、それも。飲めてるなと思ってたんだけど、飲む力が以前はやっぱり弱かったなーって。

橋 嚥下が。

D うん。刻みってさ、刻まれると結構とろみが出るじゃない？そうすると量もバクバク食べれるようになって。

橋 あー、食べやすくなるのね。ただ小さくなるだけじゃないんだね。

D そう。で、1年経ってから元に戻したんだけど、やっぱり飲む力は強くなった。ま、成長したのもあるかもしれないけど。とにかく量を食べれるようになったから良かったな。うちね、食に対する欲求が無いの。

橋 小さい時から？

D 今も。

橋 あ、今も？

D うん。

橋 その話もちっと後で聞きたいと思ったの。

D あ、そうだね、震災と全然違う話（笑）

橋 いいんだよ。その震災の時ってさ、やっぱり物が手に入らないとかさ……お店はいつ開くのかとか、並んだりとか、一人何品までとかあったでしょう？

D あったあった。

橋 で、食べる物にすごく困ったおうちが多かったと思うの。そのへんはマー君はどうだったかなと思って。食べる物、食べる種類っていうかさ、そういうのは大丈夫だったの？震災の時は5～6歳として、その嚥下とかのやつも、まだそんなには逆に気にしてなかったかもしれないけど。

D そうだね、子どもだから、そもそも離乳食の延長みたいな感じだったからね。

橋 ほら、これしか食べないとかっていう子もいるでしょう？ポテトしか食べないとか。

D あ、ポテトとか揚げ物とか、乾いているのは苦手なのね。だからレトルトでご飯とか。私も仕事してたからさ、あとご飯のパックとか、ああいうのを柔らかくして。

橋 震災の時も？

D うん、そうだね。あの、石油ストーブが押し入れに入ってたの。

橋 おー。

D それが一番助かったっていうか。で、灯油もね……。

橋 あった？

D あったんだね、あの時ね。

橋 いやー、神の助けって思ったよね。

D そうそう。石油ストーブと灯油が残ってたのはすごく助かったね。

橋 すぐ停電になったでしょ？

D なったねー。

橋 台原あたりもなったよね。

D あれよく思い出すがさ……あの頃プーさん保育園ともう一つ、あおぞらホームにも行ってたの。

橋 うちも行ってた、あおぞら。

D あはは、そう。でも5歳違いだからね。

橋 年代が違うからね。あおぞら、3ヶ月しか行ってないの。

D へー。

橋 そのあと、障害児枠で保育園に年少から入ったの。

D なるほどね。なんかね、拓桃に行った時に、やっぱりアーチル（仙台市発達相談支援センター）とかも関連あって、アーチルの人が、療育手帳のこととか、通う保育所のこととかいろいろ心配してくれて。「毎日じゃなくても通える時は行ってみてはどうですか」みたいに心配してくれて。

橋 それがあおぞら？

D そう。最初はなのはなホームだったんだけど、その時ダメだったんだね、ちょっと理由忘れたけど。で、あおぞらホームを紹介してくれて。

橋 鶴ヶ谷までどうやって行った？

D 旭ヶ丘駅からバスが。鶴ヶ谷支援学校のバス。

橋 鶴特の。あー、うちも乗った。鶴特のバスに乗せてもらった。

D そう。旭ヶ丘まで行く時は。仕事が休みの時は、週に2回くらいはあおぞらホームに行って、あと仕事の時はプーさんに行くっていう感じだったんだよね。仕事の時は保育園で、仕事を休める時はあおぞらホーム。

橋 あおぞらホームも週2ぐらい行って？

D そうだね、週2は連れて行くようにしてたね。

橋 でもやっぱりさ、一番最初に拓桃と出会ってたのはすごく大きいねー。

D そうだね、今思うとねー。

橋 で、そのあとに、学校は光明に行ったのね。

D そうだね、小学校2年まで。

橋 で、小松島に移ったのね。

D そんな感じ。だから震災は、やっぱり学校に行く前だったから……

橋 ちなみに場所はどこに、一緒にお家にいた？

D そうなの！

橋 あ、一緒にいたの。

D そうだったの。だからね、それは良かった。離ればなれだったらねー。

橋 ねー、そのあとどう出会うっていうのもね。

D ねー。お家に戻ってきたらすんごい揺れて、とにかく出口確保しなきゃと思ってドアを開けたら、マンションなんだけど、周りの家もみんなドア開けて、「えー」ってみんなで。昼間はお父さんって仕事に行くじゃん？だから女子どもだけマンションに残っててさ。

橋 何階？マンションの。

D うちの3階。上のほうはだいたい揺れたみたいだけどね。まあうちも揺れたけど。

橋 マー君と2人だったんだね。

D そう、2人だったから良かった。

橋 一人っ子だったよね？

D そうなの。ユウヤ君は？きょうだいいるの？

橋 ユウヤも一人っ子。

D そうなんだー。

橋 うちと一緒にいなかったんだけどね。

D いなかったの？

橋 いなかったの。その時 10 歳で……。

D ああそっか、学校。

橋 その日、卒業式だったのよ。

D ああそっか、そういうシーズンだね。

橋 金曜日で、卒業式で、卒業じゃない人たちはお休みじゃない？で、放デイに行ってたの。

D 放デイか。

橋 大学病院のすぐそば、柏木の「ぱるけ」っていうところにいたの。

D うんうん。小田原からじゃあちょっと遠かったね。

橋 うん、近いのよ。近いには近いんだけど……ってやつだったのね。近いんだけど、大学病院に行くほうがものすごく混むから、うちのほうに行くのって下りだからさー、その上り方面が、あの日はもう真っ暗で信号もついてないし、もう動かないのよー。

D そうだよな、信号でね。

橋 車がもう道路を埋め尽くして動かなくてね、辿り着くのにすんごい時間がかかったの。だけど、放デイにいたらととりあえず……。

D え、電話で連絡取れたの？取れなかった？

橋 取れない。

D だよなー。

橋 だからとにかく向かう（笑）とにかく向かう。必ずそこにいるのは分かってるから。

D うんうん、そうだね。

橋 そう、うちは別々にいたんです。

D でもね、海浴いじゃなくてね、良かったよね。

橋 そうそう。もし家がもうちょっと東のほうで、例えば新港のほうとか、放デイがそっちのほうとかってなったら……。

D そうだよな。送り迎えで被災した人もいるって聞いたからさ。

橋 何ともね。でも台原だからさ、水のことには心配ないよね。

D 何かね、1、2回公園に水汲みに行ったんだけど、水道と電気は復旧が早かったんだよね、割と。

橋 水道と電気が早かったんだ。電気は早かったよね。でもお水早くて良かったねー。

D そうだねー。

橋 それだけちっちゃかったら、逆に連れて歩けたのか、全然連れて歩けなかった？

D あ、一人で置いて来れる人じゃないから。

橋 置いて行けないよね。

D そう。で、台原森林公園の入口で、自宅から5分そのくらいの場所に給水車が来てたから……。

橋 一緒に？

D そう。あまり重くないのを持ってって。

橋 でもちゃんと水汲みに？

D あの頃はね、従順だった（笑）

橋 あははは、「あの頃は」（笑）そっか、マー君と一緒に行けたのねー。

D もー今大変だよー。あれって言うとやらないし、これって言うとそれやるし、もう。

橋 （笑）その頃は一緒に行ってくれたんだ。

D そう。かわいかった。

橋 かわいいしね。周りも多少まあじっと待ってなくても、ちっちゃいから、ね、割と大らかに見てもらえた。まだまだだね。

D そうね、小さい時はねー。やっぱりもう大きくなると……

橋 小2ぐらいまでだよ、それはね。

D (笑) ねえ。大きくなるとギョッとされるよ、もう。

橋 そっか、水道は数回給水に行くぐらいで復旧して、電気もオッケーで、石油ストーブも灯油もあったから。寒かったしね。

D 寒かったねー。家の中でオーバー着てね。

橋 うんうん。マー君はどうだった？怖がってた？

D いや、分かんなかったんじゃない？

橋 人によっては「ぎゃははははー」って。遊園地じゃないけどアトラクション感覚で、「ぎゃはは」になった子もいるのさ。

D うちね、どっちかって言うとそれ系かなー。

橋 あ、本当。怖がりはしなかった？

D うん、ビックリしたと思う。怖くはないんだけど、何事？みたいな感じだったかなー。普通じゃないのは分かったんじゃないかな。

橋 で、電気がそのあと全然使えなくて、何かが起こったんだっていうのは感じてたんだ。

D そうだねー。もうその日はさ、ストーブあったなと思って、ストーブと灯油の準備して。ストーブあるとさ、上でちょっと温められるからね。

橋 そうね。

D 味噌汁の残りとか、ご飯の残りとか全部入れてさ。

橋 おじやみたいだね。飲み込みやすいしね、うん。

D そう。それで、うちテレビ無いから、ラジオでいろいろ聴いて。

橋 ああ。テレビが無いことはそんなに普段と変わらないのね (笑) ラジオはあったの？

D ラジオはあったから、ラジオで。

橋 でもあの時は、情報は全部ラジオだったね。

D あ、そう？そうなんだ。あれ、テレビって……。

橋 そうだよ。だってテレビはつかない。

D つかないの？

橋 停電だから。

D そっか、電気ね。

橋 停電だからラジオも、コンセント差してのラジオは使えないけど、電池のラジオと、あとはそれこそ手回しの。

D あったね。

橋 手回し充電とかも買っておいたのよ。

D へー。使えた？

橋 ちょっと使った。

D あるといいのかなあ。

橋 ユウヤのいるところにラジオは必要だし、でも自分がちょっと離れてっていう時は、手回ししながら (笑)

D ふーん。でもね、電気が早めに復旧したから。

橋 そうだね、電気はうちもそんな困らなかった。水道がちょっと遅かったの。で、ガスはものすごく遅かった。

D ガス遅かった。うちも1ヶ月以上経ったかなー。

橋 そうだね、1ヶ月きつかったねー。お風呂はお湯沸かしたやつ？マンションでお風呂は？

D お風呂はね……。

橋 オール電化？

D ううん。都市ガス。だから、ガスずっと使えなくて。

橋 あ、ほんと。

D 電気でお湯は沸かせるから、体は拭いたりしてたけど、やっぱりお風呂に入らないとね、なんかかぶれたみた

いになってきてさ。災害があった時って「3日間過ごせれば」っていうのがあったよね。だから、震災の山を越えるまで、もうとにかく2人で大人しく、あるもので時間を過ごそうと思ってたのね。

橋 3日間。

D そう、3日間。とりあえず3日間と思って。でもそしたら、結構遠くに住んでる人から「大丈夫？」って連絡が来て、いろいろ送ってもらったり。

橋 それは、マー君のことを知ってるお友達？

D そうだね。何回か一緒にお出かけした人とか、市内の親戚の人とか。あんまり付き合いはないんだけども。

橋 あー、そういう時だから。

D うん。その親戚のうちが、泉崎に住んでるおじさんおばさんなんだけど、オール電化だったのね。

橋 泉崎ってどこだ？

D あのね 286 号線の南側。オール電化で「お風呂入れるからおいで」って言ってくれて。

橋 あー、ありがたい。

D そう！

橋 でもそこまでどうやって行くの？

D その当時はパパがいたの。

橋 ああそっかそっか。その頃はじゃあパパと（笑）

D その頃はいたの！それを話すと日が暮れるから言わないけどさ（笑）

橋 さらっとね。うふふふふ。

D そう、今は母子家庭だからね（笑）パパの車でお風呂いただきに行ったり、あと温泉に行った時もあったかなー。

橋 うちもそうだった。プロバンの人がお風呂入りにおいでーって言ってくれたり。

D やっばりお風呂ね。毎日じゃなくてもさー。

橋 うちかきむしり君なのね。もともと。

D あー。

橋 赤ちゃんの時からもうずっと皮膚科と離れられない人で。本当に困ったのよー。

D で、そのプロバンの方の？

橋 お風呂に入りに行ったりとか。あとお父さんがいる時は山形の温泉に入りに行って、それでちょっと何か買えるかなとかさ。

D あ、そっか。

橋 仙台よりも買えたじゃない。

D うんうん。あとほら、ガソリンなくてひどかったでしょ、あの時ね。

橋 ひどかったよー。

D 山形に行けば入れられても、こっちでは無かったり。

橋 うち全然並べなかったから、ガソリンスタンドももちろん並べなかったし、いつ入れられるか分かんないところにユウヤと一緒に待てなくて。

D 行列だったもんねー。そして、待っても10リットルまでとかってね。

橋 ほら、次の日の分とかって車をそのまま置いて、一晩置いて順番取りする人も。

D あ、開店待ち？

橋 そう、開店待ちで車を置いて行っちゃう人とか、車の中でそのまま過ごす人とかもあったもん、やっぱり。うちの近くのガソリンスタンドとか。

D そうなんだー。

橋 絶対並んでるな、っていうことはあそこの周りが渋滞してるからとか通れないなーとか。

D ガソリンはちょっと険悪だったよねー。

橋 ねー、大変だった。どこもあっちこっち行ける人でもないから、結局そんなに行かなかったけど。

D でも、パパさんはお仕事とか？

橋 うちパパさんがもう「ガソリン使うな」って言ってたもん。

D (笑)

橋 え？って。車2台あったのね。お父さんは自分の車に乗って仕事に行って、うちに1台あったんだけど、「こっちの車のガソリンが無くなったらこっちに乗るんだから、ガソリンは減らすな！」って言われてて、なんてひどい！って思っていました(笑)

D あははは。そうなんだー。

橋 そしたら、知り合いの人が「困ってるでしょ」って携行缶でガソリン持ってきてくれたりした。やっぱり障害のこと分かっている人で。

D へー。ガソリンを譲ってもらえるような状況じゃなかったよね、あの頃はね。だってもう自分の車のガソリンだけでも不自由してるのに、よくその方は譲ってくれたね。

橋 うん。お父さんがいないお宅なんだけど。携行缶は、普通のペットボトルとかに入れちゃいけないじゃない？専用の缶に入れなきゃいけないっていうので、それもすぐ売れ切れたさ、ダイシンとかああいうところもね。

D そうなんだよね。

橋 でもそこのお家は持ってて、うちにそれもあるから持ってってあげるって。

D えーすごいよ、それは。

橋 もうほんとに、はあーって、後光が差して見えるようだった、その人が来た時。

D うん、すごい人だ。

橋 そうか、お風呂はやっぱり困ったよね。あとはさ、マー君はその時はそんなに怖がった感じじゃなかったし、食べ物もすごく困ったってということじゃないとしても、そのあとに何か変化とか……あれ？やっぱこれちょっと、なんか描く絵がおかしくなってきたとかさ、そのあと言葉が出なくなったとか、何か変化とかがあった？

D もともと言葉無かったからね。そして、あんまり動揺しないで、その3日間は……まあ4日、5日、6日ってなっていくんだけど、もう平常心で過ごそうと思ってたから。

橋 あ、母がね。

D そう。マー君も、もしかして「あれ、保育園ないの？」くらいは思ってたかもしれないけども、昼になれば近場を散歩したり、いつもの週末みたいな暮らしをしてたから、あんまりね、乱れることはなかったね。やっぱりあの頃はね、分かってなかったんだよね。

橋 そうね、経験ないから分かんないし。

D うん、大変なことが起きたっていう認識が無かったんだと思う。

橋 何か感じてはいるけど、でも、ああ行かなくていいんだなって。

D そう、そんな感じだった。

橋 学校にずっと通ってて、「え、学校は？」っていうのでもないもんね。

D うん、そうなんだよね。

橋 そうか、そのくらいの年齢だったのはかえって良かったのかな、母も。

D そうだね。そして頭も大して発達してなかったから、理解が乏しいのが逆に良かったのかも。

橋 あー。

D ト라우マも無いし。まあ今でも地震って言うと笑い出すけどね。何か思うところはある感じはあるけども。まあ余震も多かったしさ、ね。

橋 そうだね、4月もあったじゃない。

D そう、大きいのね。だから地震ってなるとテンション上がるみたいな、今は。

橋 困った時もさ、うちの子どもって笑ったりするじゃない？どうしていいか分かんない時も「うははー」ってなったりするよね。

D そう、それだね、そのタイプ。困った時に笑うタイプ。地震じゃなかったって、何か困ると話題を変えたり、逃避するタイプ。

橋 どうしていいか分かんない時だよ。

D うん、そうねー。理解が乏しかったから、後で引きずらないで良かったとは思うねー。

橋 母は、例えば近い人ですごく被害があったとかさ、亡くなった方がいたとか？

D あ、うちね、両親の実家が巨理町なのね。鳥の海って分かる？

橋 福島も近いほう？

D そこまでは行かないんだけども。

橋 海のほうだよ。

D そう、海沿いだったのね、両親の実家が。それでしばらく連絡取れなくて。大変だったね、あっちはね。

橋 え、水は来たの？

D 来たよー。だってもうすごいよ。パパの車でさ、とにかく連絡取れないから行くだけ行って、会えるかどうか分かんないけど行って行ったら、もうね、本当に映画のロケ地みたいな感じ。

橋 残骸みたいな感じ？

D もうすごいよ。家とか柱とか全部粉々になっててさ、それがとにかく山積みになってるっていう感じ。本当に映画のワンシーンだよ。

橋 お家は無いの？

D 無い無い。誰がどこのお家かも分からない感じ。

橋 あー。

D あれどこだっけって感じ。そしてね、重機とかが入ってる頃に行ったんだけども……

橋 え、そこまで連絡取れてなかったの？

D 取れてない。1週間くらい。

橋 どこで会えたの？再会した時って。

D 会えたのはね、電話かなあ。その日は会えなかったからさ。

橋 行った時ね。

D うん、お母さんの実家も水産業とかやってたんだけどね。

橋 あーそうなの。

D そう。もうね、そこのお父さんっていうか、まあおじいちゃんだね、が、「俺は死ぬまでここから離れない」とか言い出してさ。

橋 家は無い……んだよね。

D そこの家はね、割と大丈夫だったの。

橋 あー、そうなの。

D そう。きっと海沿いから波の流れと同じ向きに家が建ってたんだね。だから、水槽とかポンベとかは全部流れちゃったけど、家自体は2階まで残ってて。たぶん半壊扱いだったのかな。津波が来てみんなもう避難したんだけど、そのお父さんだけ2階に残ってて。

橋 2階に住んでたの？

D そう。そして津波でもう1階にダーって水が来て、そしたらその息子さんに電話が来て「ボンベ流された、早くどうかしろ」みたいに（笑）どうかしろって、ねえ。でね、ヘリコプターにピックアップしてもらって助かったの。

橋 はー、本当に大変な。ちょっと間違ったら……じゃないけどさ。

D ね。

橋 でも2階に留まってくれたからまだ逆に良かったのかもしれない。何かにつかまって動こうとしたとかってそういうことじゃなくて、そこに留まっていた。

D うん。で、あの辺は海岸線が広いから、川だと遡上してすごい水位が高くなっただろうけど、そうじゃなかったから、1階までで済んで助かったんだよね。

橋 でもさ、広域にその辺みんな全部被害に遭ったよね。

D そうだね、すごいよもう。結構内陸のほうにお墓があったんだけどさ、そこに船が、お墓に船が乗ってた。

橋 打ち上げられて。

D そう、もうびっくりした。

橋 はー。

D お母さんのほうの実家はね、もう跡形も無かったね。

橋 だけど、無事ではいたの？

D その時は無事だったのね。津波が来るからって、みんな暗い中をね、土手沿いをずっと歩いて、逢隈っていう少し内陸のほうまで歩いたんだって。で、その次の日に、そのお母さんのほうの、父の弟がついてただけど、その弟さんが亡くなっちゃったんだよね。その日は助かったんだけど、そのあと親戚の家に移動して、大丈夫だねってなったら倒れちゃって。そのあともおばさんが、避難所でいっぱいご馳走作って近所の人に配ったり頑張って暮らしてたんだけど、肝臓悪くして、何年後かな、亡くなっちゃって。

橋 何も無かったっていうのはちょっと、ね。やっぱりそういうことがあったから、体もねって思うよね。

D そうだね。仲良しの夫婦だったから。私たちの前では普通にしてたけども、ショックだったよね。でも、亡くなる前にお孫さんが結婚式したり。

橋 あの当時は本当にとんでもなかった。うちも、まあ小田原で平地じゃない。車で20分とか行ったら多賀城にはもう津波来てたんだよね。多賀城の、当時はジャスコだったところとかもさ、車がぐっちゃぐちゃになってて。

D マンションの上に住んでる友達が、もう目の前を車が流れていくとかって。

橋 あの辺なんて、とても考えられなかったよね。え、多賀城が？とか。

D ね。小田原のほうは大丈夫だったんだよね。

橋 うん。波は来ない。津波のあれは無いし、地面も大丈夫。ちょっと行くと新田のあたりとかはさ、新しいマンションの下から水が出たりとか。

D えー、そっか、地盤がね。

橋 もともとほら、新田って田んぼだったところにマンションがいっぱい建ったから。ちょっと行ったらそういう被害がある。うちは全然何にも……うちのマンションは免震ですんごい揺れた、横揺れで逃すからね。

D あ、免震って揺れるの？

橋 うん、地面にガッってなくて、下にクッションみたいなとかそんなので、揺れてパワーを無くすっていうかさ、相殺しちゃうから、すんごいずーっと揺れ続けてるのね、横揺れで。

D あ、そういう揺れなんだ。

橋 うん、横揺れで。

D 違ったかもね、うちと。

橋 だけど被害は無かった。ほぼ無いの。

D わーすごい。へー。うちの揺れはそういう揺れじゃなかったね。なんか木の上に乗ってるみたいな感じ。しがみついて……。

橋 ユッサユッサユッサって。

D そうそう、そんな感じ。その時も一部損で。やっぱあちこち……。

橋 そっかー。でも3階で、マンション自体に被害が無ければ、避難所とかは？

D 行かなくて済んだの。それは良かった。

橋 それは、考えた？避難所に行くことを考えた？考えなかった？

D なんかね、様子は見に行ったのね。

橋 2人で？

D 台原小学校と中学校と。あの時ね、炊き出ししたの。小学校で。

橋 小学校、避難所になってるところで？

D そう。

橋 台原小か。

D うん。パックにワカメご飯みたいなのを用意して、様子見に来た人に配ってくれたの。

橋 じゃあそこにいなくてももらえたんだ。

D そう。「どんな感じですか」って聞きに行ったら。

橋 それはマー君と一緒に見に行ったの？

D そう。周辺がどんな感じになってるのか分かんないから、情報収集を兼ねて訪れたら、パックで用意してくれてて。

橋 じゃあ早かったんだね、台原小。

D そう。で、「またあるんですか」って聞いたら、「もうこれが無くなったら無いけども、あるうちは」って渡してくれて。あれはすごく良かった。貴重だよ、うん。

橋 そうだねー。場所によって扱いがもうバラバラ……統一されては無かったから、ここの避難所に滞在というかさ、チェックをして、そういう人にしかあげないとか。

D あー。

橋 避難所とかに行っても、結局お子さんの障害のあれで、うるさいとか……。

D そっか、だよー。

橋 やっぱり迷惑かけてる感じで、親がいたたまれなくて避難所を出たとか、いろいろ。

D なるなる。

橋 うちが避難所に行くことは考えなかった、考えられなかったのね。やっぱり息子が決して落ち着いてないっていうか（笑）やっぱりとてうちも連れてけないからさー。

D 周りがさ、まだ余裕があってね、あたたかい目で見てもらえてるうちはいいけども。

橋 その時に余裕なんてないさー。

D ね、もう殺伐としちゃうからさ、そこに火を注ぐようなことはできないよねー、やっぱりねー。

橋 で、ありがたいことに被害も無かったから。たくさん備蓄してたし。

D そうだったんだ。良かったね。

橋 たくさん溜め込んでた。やっぱり避難所に行くってことは考えられなかったから。絶対うちは無理だって。うちは8階なのね。で、1階が例えばガーって潰れても、ここにしようみたいな（笑）

D やだー（笑）

橋 ほら、エレベーター使えなくなって……。

D そうだね。あ、階段で？

橋 うん。もちろん非常階段はあるけど。ほかに行くことはちょっと考えられなかったから、部屋にいるか車に移動するかぐらいしか考えられなくて。すごいたくさん備蓄してた。

D 良かったね。

橋 電池もそうだし、カセットコンロ、カセットガスもいっぱい置いといたし。

D うんうん。電気が早かったのは助かったよね。電気があればお湯も沸かせるし、調理もできるし。

橋 暖も取れるしね。

D そう、電気は助かった。

橋 でもその石油ストーブがあったのも良かったよね。

D そうだね。最初の何日かはね。

橋 安心材料っていうかさ。で、ストーブはあっても灯油がなければダメだしね。

D そうだよー。

橋 そっかー。じゃあ避難所はとりあえず。

D 行かないで済んだの。

橋 様子を見に行ってお飯はもらったけど、家にいられるから避難所に行くっていうのではなかったのね。

D なかったね、うん。

橋 その様子を見に動けたのも、ね、マー君も偉いね。

D あの頃は就学前だったからさ、きつとちっちゃい子連れて来たからくれたんじゃない？

橋 大丈夫か？ってね。帰って家にご飯あるの？とかって思うよね。

D うん。あれ、ご飯どうやって炊いたんだろうね。その台原小学校で配られたご飯さ、ガスも電気もあの時なかったのに。

橋 そういうところってさ、大体あるのよ。だって備蓄があるんだもの。

D プロパンでやったんだね、きつと。

橋 うん。あれもあるはずだよ、発電機もあるはず。

D ああそっか。そうだよ、そこまで考えてるよね、きっとね。

橋 うん。プロパンがあるか発電機かは必ずあるよ。

D 自家だね、それだ。

橋 で、水みたいなのもいっぱいあるはずだし。小学校は一応ね、避難所で、あそこまでは思ってなかっただろうけど、備蓄はかなりあったはずだから。

D うんうん。あれは今思い出しても良かったなあと思った。あの炊き出し的なものね。あと近くの美容院がプロパンだったのね。よく行ってるよな。シャンプー 1,000 円みたいな。

橋 ああ、やってたの？

D うん、そういうふうだね、近所が割と思いやりがある人ばかりで。

橋 へー、ありがたかったね。

D そう。もうね、あんまり出歩かないで、近所をお散歩するくらいで大人しく過ごそうと思ってたんだけど、周りからいろいろ、あと NPO のアシスト・エフワンっていうところから紙パンツ提供してもらえたり。

橋 えー、初めて聞いた、それは何だ？

D アシスト・エフワン。

橋 へー。それは登録してたの？ 拓桃関係とかでいろいろつながってたから？

D じゃないの。すすくサポートで知り合った人の知り合いが、オノさんっていうおじいちゃんおばあちゃんだったんだけど、オノさんの妹さんがやっている NPO だったのね。

橋 へー、知り合いの知り合いみたいな感じだったのね？

D そう、託児で何回かお世話になって。それで、紙パンツ。あの頃さ、紙パンツは結構悩みの種だったからさ。

橋 手になかなか入らなかったさね。

D そう、あの頃ね。もうユウヤくんは布パンだった？

橋 え、うちは……だって小 4 だもん。

D そっかー。「だって小 4 だもん」って言われたって、うちまだ布パン……。

橋 うんとね、保育園の時に昼間はだいたい大丈夫になって、小 1 くらいの時に夜も大丈夫になったかな。

D やっぱ膀胱の機能の発達とかもあるからねー。

橋 そうそう。で、うち濡れたの分かんない人だったから、布パンのトレーニングパンツ？ 何の役にも立たなかったのよ（笑）

D へっちゃんなんだ。

橋 ほら濡れてるじゃん、ビチャビチャって気持ち悪いじゃない、って。それが分かんない人だったから、あー何の意味も無かったって（笑）

D そうなんだー。うちね、中学まで紙パンだったかな。

橋 あ、本当。でもじゃあここで提供してもらえてすごいありがたかったね。

D そう。あと京都に住んでいる人からもね、紙パンツと、あと食べ物。

橋 それはお友達？ 親戚？

D パパの友達。いっぱい。食べる物とお菓子とかと、あと紙パンツがやっぱり嬉しかった。おっきい段ボールで届いてさ。なんかね、自分はもう一人で大人しくこの災害が峠を越すのを待とうと静かにしてたら、周りからいろいろ気にかけてもらえて。

橋 嬉しかったねー。

D うん、ありがたい思いしかないね、あの頃はね。人に何かするっていう発想があんまりなくて、マー君を守るだけで……

橋 精一杯だよ。

D 余裕がなかったからさ。

橋 でもそういう時に、ああうちのことを考えて送ってくれたんだーとか。

D ねー。なんかすごくありがたかったよ。いっぱいもらったね。

橋 それは、じゃあ本当に良かったことだね。

D そう。「あと欲しいものある？」とか「足りないものある？」って聞いてくれて。3月末くらいになると、チョコレートとか雑誌とか。コンビニに並ばないからね。

橋 うん、こっちはね。

D そう。川崎の人とかが送ってくれたり。だからね、もうお世話になった記憶しかないっていうか。

橋 すごい。

D 幸いあの頃、お熱出たりしなかったんだね。でもね、あれだ。ほら原発のことでさ、あんまり外に出歩くのが心配な期間があったじゃん。

橋 うん。

D そして病院もちゃんと機能してない時だったから、マー君がてんかんで毎日飲んでる薬があったんだけど。

橋 もともと、その頃にはてんかんのお薬を飲んでたんだ。

D あ、その頃はね、てんかんまでいかなくて、何だっけ、えーっと……忘れた。熱が出ると発作が起きる。突発性発疹じゃない、えーと何だっけ。

橋 あ、でも分かる分かる。突発性のてんかん……てんかんっていうかひきつけみたいなことね。

D そう。その予防のためのお薬だったんだけど、それがね、やっぱり不安になって。

橋 起きた？

D 起きないんだけど、飲まないといつ発作が起きるか、いつお熱が出るか……しょっちゅう熱出す人だったから分かんなくてさ。原発で一番おっかない時に、やっぱり薬はもらってこなきゃと思って、病院に行ったのは覚えてるよ。

橋 そっか、薬だけもらいに。

D そう。

橋 連絡して取りに行ったの？

D あれ、連絡したかな？してない。

橋 しないで行ったんだ。

D うん、受診した。そして、「薬は最長で2週間」って言われて、まあそれでもいざっていう時に手元にあったほうが助かるから。その頃ね、最大でも2週間しかもらえなかったの。

橋 普通の診療じゃないけど、こういう時だから、じゃあお薬を出しますっていうやつだね。

D そう、外来で。

橋 普通だったら2ヶ月とかもらえるけど。

D そう、いつもは3ヶ月分もらってるんだけど。

橋 今は2週間だけねっていう。

D そうなの。やっぱりあの原発の放射線のリスクはおっかなかったよね。分からないからね。心配しなかった？

橋 うーん。なんかさ、すごく変なメールとかが、あの頃回ってたのさ。

D え、何のメール？

橋 ほら、あの赤いうがい薬みたいなのあるじゃない？

D ヨウ素？うん。

橋 ヨウ素を飲めば大丈夫だとかさ。

D やだー（笑）

橋 あの頃本当にそれが普通のことのよう回ってたのよ。

D ふーん。

橋 そういうデマをさ、うちらぐらいならまあ小田原にしても台原にしてもあれだけど……県南のほう、丸森のほうとかそっちのほうの人たちとかはさ、ほぼ福島じゃない。

D うんうん。

橋 すっごい大変な思いをしたと思う。そういう感じもあるから、余計そういうことが、宮城のほうとかでもデマが回ってしまったんだろうけど。「配布します」みたいなね。

D へー。

橋 親の会から。「えっ？」と思って。そんなデマが親の会で回ってきた、と思って。

D いや、ていうかあれは宮城県がさ、風評被害を恐れたのかもしれないけど、積極的にちゃんと測定しなかった

のが悪いと思うよ。

橋 そうだねー。

D どのくらい深刻なのか、それとも大して心配じゃないのか、測定しないことには分かんないじゃない？それをあの頃やらなかったんだよね。あれはね、うんと嫌だった。

橋 風向きとかそういうのもね。県境じゃないじゃん。もう丸森だったりこの辺まではケアしなきゃいけない地域だって普通に分かるけど、なかなか認めないみたいなの。

D そう、そういうところがすごく嫌だった。測定点だって県庁の屋上とか、人が住む場所じゃないじゃん？地面のほうが被害が大きいのにさ。なんかそういうところがねー。そしてその頃かな、そうそう思い出した、私がすごく心配だから放射線量を測定したいって言ったら、なかよし学園の園長先生が「行政が大丈夫って言ってるんだから大丈夫」みたいな返事でき。

橋 ふーん。

D ケンカした。あの時（笑）

橋 仙台市だけ？

D うんそう。でもほら仙台市だってさ、どこがどのくらい高いか低いかわかんないじゃん？それは測定してみないと分かんないじゃん。だから測定して、どのくらいリスクがあるのか言われるなら分かるけど、分からないのに大丈夫だとか、あと過剰に心配したりね。だから測定しようって言ってんのにな、「私そんな測定器も持っていないし、私に何をしろって言うんですか」みたいなさ。それで、パパがコンサルタントだったのね。で、会社で放射線量を測定する機械を調達したからそれ借りて、なかよし学園の敷地を測定したり。そしたらね、結構低かったの。あ、これに書いてある。ちょうど3月のは無いんだけど、この場所と放射線量を測定した記録がある。

橋 へー、日記みたいな感じ？これ。

D 3月の頃からはメモしてたんだけど、それはなくて、これは4月以降。

橋 え、それは震災があったから、何かちょっと残しておこうと思って書いたの？

D そんな発想はなかったねー。やっぱり、今安全なのか安全じゃないのか、やっぱり放射線量は心配だったから。で、この頃はパパがいて車があったから。結構年末まで定期的に測定して、危なくはないほうなんだなっていうのは分かって。あと測定地点と測定値のプリントも作って、なかよし学園で配布したよ。だから、ねえ、分かれば安心するもんね。そして蓋開けたら、県北のほうが高かったんだよね、あの時ね。

橋 あ、そうなの？

D うん、風の向きで。仙台あたりは低くて、こういうふうの流れに流れていったみたい。あの頃は放射線は心配だった、測るまで。測って分かってしまえば安心するのにさ、その測ることもやらないっていうのがすごく嫌だった。宮城県もだよ。だって大気降下物が、全国に定点があってみんな報告してんのに、宮城県だけ機械が故障中とかいって、年明けの頃までやらないんだよ。そんなの機械なんかすぐに修理してさ。あれ絶対……。もう私ね、こういうのすごく嫌なの。

橋 いくつか故障するのもおかしいけどさ。でも他にあるよね。

D でしょう？ね。だからそういう不安に寄り添わない人はすごく嫌。でもそれを言ってもらえない時だったとも思うけどさ。……なんか話ズレた。

橋 マー君本人のほうでさ、何か困ったこととかそういうのは無かったの？

D あのね、最初の頃は何か気配を感じてたのか大人しくて。あと、いつもの週末みたいにお散歩とか、近所の偵察を兼ねて安全なところをお散歩に連れてったから、なるべくいつもの日常と変わらない感じで過ごしてたせいか、あんまり、うん。

橋 そういうふうに母が努めていたのよね。

D そうねー。ていうか、それしかやれることが無かったっていうかね。だからあんまり乱れたりはしなかったんだけど。でも今でも地震っていうと笑い出したり、なんかテンション上がる。あとさ、普段は放っというてんのにさ、地震だと母が手厚く接してくれるのが嬉しいんだと思う（笑）

橋 （笑）

D だって、何にも無いのに、時々「地震！」とか言って抱きついてきたりさー。

橋 甘えられる時っていうのかな。

D そう。地震になると甘えられると思ってる。

橋 そうやって、ね、母に甘えてくるとかもだんだん無くなってから（笑）貴重だよ。

D そう。ユウヤ君は？甘えてこないの？

橋 でもすごい波があるよ。うちほとんど2人だから、お父さんは週末だけ帰ってくるのね。自分の母親がもう認知症とかでそっちにいなきゃならないから。

D あー、まあそういう年齢だね。

橋 気楽な2人暮らし（笑）っていうのもあるから、結構平日は平和で。

D そうなんだ。抱きついてとか来ない？

橋 それは無い。それは小さい頃から無い人だから。

D そっか。

橋 なんだけど、甘えては来るよ。あとは、最近すごくしゃべりたい。今行ってるところって精神の人が多いから、会話が飛び交ってるのさ。

D うんうん。え、じゃあ釣られておしゃべりになった？

橋 息子はとにかく聴覚過敏でもうひどいんだけど、とにかく人の声、音もそうだけど全部入っちゃって全部聞いてしまう。それを聞かなくてできないからイヤーマフとか着けて行ってるんだけど。でも会話とかを聞くじゃない？聞きたくて聞いているわけじゃないけど。で、自分もしゃべりたいんだろうね。そのしゃべりたいのがすごい大変。

D 自分もしゃべりたかったらさ、人から聞かないとしゃべれない？

橋 でもちゃんとしゃべれるわけじゃないから。今ね、吃音がすごい。

D ぶーん。

橋 昨日、一昨日ぐらいに主治医のところに行ってきたけど、やっぱりそうやって頭の中とかね、心っていうかさ、話したいとかっていうのは、母だから来るのさ、慣れてる人だから聞いてもらえると、話したいっていうので……ここまで来てこうなんだけど。

D あー。

橋 すごくしゃべりたいこととかも、瓶の口みたいにキュッとなって、選び出しも大変だしうまくできないから、すごくもってしまう。一個のことを言うのにもものすごく、ずーっとずーっともってるのね。

D みんな一生懸命だよ、そういう、ね、伝えたいんだもんね。

橋 まあ私は待ちますわ。聞くよと。それをもう「ちょっと、もう早く言ってくれる？」とかさ、やっぱりさ……。

D 私なんか「うるさーい」だよ（笑）「静かにー」だよ（笑）

橋 そう、「うるさーい」って言いたくなるじゃない。でもそれをお父さんが「うるさい」って言うからさ。そういうの、ああかわいそうだなーと思ってしまう（笑）

D そう。なんかさ、自分も言うのに人に言われると嫌なのね（笑）

橋 そうそう。かわいそうって。私は聞かなきゃダメなんだなーって。

D なんかね、前は割とポーッととしてて素直だったんだけど、大きくなって力がついて身長も高くなってくると、やっぱり外に出すようになって。

橋 表すようになるんだよね。

D そうすると、人と関わるのが好きで、朝のバスの時とかに友達のママに抱きついたりするのね。

橋（笑）それはでも、嬉しいほうでしょ？

D そう、嬉しくてなんだけど。

橋 嬉しいとか楽しいとか。

D でもダメじゃん。嫌じゃん。

橋 母ならまだしもね。

D だから家でもね、「もうギューなし」とかって、「ギューは16時までなし」とかってやったら、ますますやりたくなくて。今そのせめぎ合いなの。

橋 そうだねー。

D だって外で抱きつかれたら……。

橋 ね、握手だけにするとかね。でもそれも誰でも彼でもいいわけじゃないんだよね。

D ね、それが分からないからさ。

橋 ちなみにマー君は、自閉症でいいのかな？

D 分かんない。自閉症なのか聞いたことないの。

橋 判定は何になるの？

D 今度聞いてみる。

橋 えー（笑）聞いてないの？

D あのね、障害は知的障害で、その拓桃に母子入所した時に院長先生から言われたのは「精神運動発達遅滞」だったのね。

橋 うんうん。発達のほうは、知的障害があつて……

D 精神と運動……

橋 広汎性障害、発達障害ぐらいかなとか、広い意味で少しあるぐらいかな？

D うーん、それを聞いた時、まさしく精神も発達も遅れてるし、運動機能も遅れてるから、なんかすごくいい名前をつけてもらったと思って、先生にはいつもそれ言ってる。

橋 手帳は持ってるよね？

D 持ってるよ。なんか知的障害っていうか……

橋 別に聞いてきてっていうことではないよ、大丈夫だから。

D あ、でも気になってたから聞いてみる。なんか知的障害って言うと、運動のほうは大丈夫っていうふうに思われちゃうかもしれないじゃない？

橋 でも小さい頃はたぶん、そっちの体のほうがやっぱり心配で……だから拓桃だったんだろうし、小さい頃ってね、

D あまり精神のほう分かんないよね。

橋 そうそう。だんだんでないと発達障害関係は。特に発達障害もそんなにでなければ、判断名とかって……

D よっぽどひどかったら名前つくんだらうけど。

橋 後から変わったりするんだもん。

D そうなんだ。

橋 そう、結構診断名が変わる人います。

D そうなんだ、聞いてないから、そっか。

橋 それはそれで大変なの。じゃあ今日はDさんにお話を伺いました。

D はい、いろいろ聞いてくださってありがとうございます。

橋 また何か思い出したことがあったら教えてください。ありがとうございます。

D ありがとうございます。